

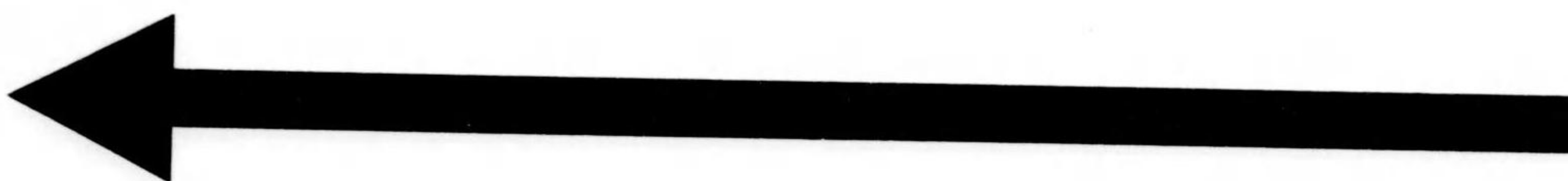
特105

827

六祖大師



始



持105
827

序

六祖大師は我が國禪宗三派の本源たる支那禪宗五派共同の祖先なり。即ち達磨大師より六代目の祖にして、師までは禪宗は未だ分岐せず。師の弟子に至りて五葉に別れたり。大師人と爲り英偉、王陽明の如き、達磨慧能の如きは眞に仙人と稱すべきかと謂へり。又六祖法寶壇經の中には明文を以て知行合一の說を精説して陽明に魁けたり。偉なりと謂ふべし。著者佛教の爲に比較界の偉人を傳説す、幸に大方の愛讀を望む。

正の如きは
10.知行合一
14行合

大正十四年九月八日

齋木仙醉識す

六祖大師

達磨の幼時

所 南印度香至王の宮殿。
人物 香至王。

二十七祖般若多羅尊者。

王子月淨多羅。

功德多羅。

菩提多羅。

其他群臣。

王 佛法は和合の妙法、朕釋迦文佛嫡々相承の二十七祖般若多羅尊者に此珠を賜ふ。
般若多羅尊者 無價の寶珠、恭けなく受け奉る。(尊者王子等の智慧を試みんごとて寶珠を三王子に示して)王子達、能く此の寶珠に及ぶものがありませうや。

月淨多羅 此珠は七寶の中の尊であります、固に此の寶珠に踰るものはありません。

功德多羅 誠に兄上の仰の通り、此寶珠に喩るものはありません。

般若多羅 此は是れ世寶です、また上とするには足りません、諸寶の中では法寶を上とします、此

は是れ世光です、また上とするには足りません。諸光の中にては智光を上とします。此は是れ

世明です、また上とするには足りません、諸明の中にては心明を上とします、此珠の光明は自

ら照らすことは出来ません、智光を假りてこそ辨ふべけれ。

般若多羅尊者 ふん、然らば問はん、諸物の中に於て何物か無相なる。

菩提多羅 不起無相なり。

般若多羅尊者 諸物の中に於て何物か最高なる。

菩提多羅 人我最高なり。

般若多羅尊者 諸物の中に於て何物か最大なる。

菩提多羅 法性最大なり。

般若多羅尊者 げにも。

香至王 落着きたる菩提多羅が答辯、之も尊者が感化でがなあらう、人々世寶を以て寶とする前に心

寶を以て寶とし、心物不二の悟を究め、人我最高の悟を本として、世に奴隸なからしめ、無理

なからしめば、政治も輝きて法性最大の證とならん。如何に皆々爾か思はずや。

一同 (平伏感歎す)

達磨梁の武帝に見ゆ

所 梁の武帝の朝廷。

人物 梁の武帝。

志公等。

達磨。

武帝 如何なるか是れ聖諦第一義。

達磨 廓然無聖。

武帝 朕に對する者は誰ぞ。

達磨 不識。

武帝 (契はざる思入)

達磨 (すたくと辭し去る)

武帝 一体あの胡僧は何者じや。

志公 陛下還つて此の人を御存じですか何うですか。

武帝 頓と分らぬ哩。

志公 此れは是れ観音大師の佛心印を傳ふる者で御座りますぞ。

武帝 何、観音大師の佛心印と申すか。それは惜しいことを致した。それでは直ぐと使を遣はして今一度請せん。

志公 仰有いますな陛下使を發して連れ來らせんと、たとひ使が参りましてもあの者はもう回つては参りません。

面壁九年

所 少林寺。

人物 達磨。

折しも月出で來る。

神光斷臂

所 少室峰。

人物 達磨。

神光 (後に普覺大師)

十二月初九夜、大雪市地埋山沒峰。

神光 あ、寶淨禪師の教を蒙りて、南して少林寺に達磨大師を尋ねても入室を許されず、如何かせん今更ら道を得ずんば如何で歸られん。假令此身は凍へ果つるも祖室の前に。お、そうじやそうじや。(祖室の窓前に引還す、達磨顧眄せざるがごとし) この夜ねむらず、坐せず、やすむことなし、堅立不動にして、あくるをまつうちに、夜雪なさけなきがごとし、ややつもりて腰をうづむ、おつるなみだ滴滴こぼる、なみだをみるに、なみだをかさぬ、身をかへりみて、身をかへりみる、自惟すらく、「昔人道を求めば、骨を敲き髓を取り、血を刺し飢を濟ふ、髪を布き泥を掩ひ、崖に投じて虎を飼なふ、古尙此の若し、我又何人ぞ、」と。【以上琵琶歌】

達磨 (あはれみて味且に問ふ) 汝久しく雪中に立つ常に何事をか求むべき。

神光 (悲涙ますく) おごしていはく) 惟願くは和尚慈悲、甘露門を開き、廣く郡品を度したまへ。達磨 諸佛無上の妙道、曠劫にも精勤す、忍に悲すして忍ぶ、豈小徳小智、輕心慢心を以て、眞乘を冀はんと欲して、徒勞勤苦せんや。

神光 (ききていよく) 誨勵す、ひそかに利刀をとりて、みづから左臂を斷つて置干師前す)

達磨 諸佛最初道を求む、法の爲めに形を忘る、汝今臂を吾が前に斷つて、求むるも亦可なる在らん

(神光をいたはりて堂奥に連れ行く)

六

平和の夕暮

所 嶺南新州の百姓家。

人物 慧能の母。

慧能。

仕出百姓一人。

百姓 慧能さんのお袋は居らつしやるかいのー。

慧能の母 (老婦人、今しも着物を縫ひ居る、障子を半明けて姿を現す) これは何方かと思つたら、お隣ので御座いますか。

百姓 豪らいお精が出ますのね。今日は畑で大根を抜きましたが、大邊立派なのが出来ましたで、二本お上げしませう。

慧能の母 これはこれは立派なものを頂戴して誠に有難う存じます。慧能が戻りましたら煮て食べさせませう。

百姓 慧能さん云へば誠に能く出来たもんじや。御母さんを慰めんとて一日能く精を出さつしやる

何分御家柄が御家柄じやで。

慧能の母 あれも父が生きて居つたらあのやうに働かいでも済むであつたらうに。

百姓 御父上は昔は范陽のは一立派な御役人様じやつたげなが、悪人の爲にそねまれて此嶺南へ流されて豪い御苦勞。

慧能の母 貧乏は致し方ないこと、して父が早く亡せましたのであれも豪い苦勞をします。

百姓 まー然しそう心配さつしやるな瓜の蔓には茄子は生ぬでな。今に慧能さんも立派な御方にならつしやるで御座らう。では之で御免を。

慧能の母 左様なら有難う御座いました。(見送りて、縫物を仕舞ひ、井戸端に大根を携へ行き去つて居る)

慧能 (空なる柴籠をになひ片手に一尾の魚を提げて持ち歸る) あ、今日も柴を賣り切り、一尾の魚を母者人に購ふて返へることが出来た。何よりじや。鳥は時に歸り、人は家に歸る、人間の仕合せは此時である哩。

慧能の母 慧能ではないか、今日もよく賣れたか、いかい苦勞であつたらう。

慧能 いやなに阿母さん、若い者は働きますのが樂で御座います、今日も御蔭で商がありましたから是れ此の通り一尾の鯛を購ふて参りました、阿母さん何うぞ召上つて下さい。

七

慧能の母 今しがたお隣の御主人が見えて畑に出来たのだと云ふてこれ此の通り立派な大根を二本下された。早速晚餐の用意をしませう。(母は鯛を携さへて家に入る。)

登立 曉

所 附近の山。

人物 慧能。

柴を刈り、籠に入れて、市に行くところ宜しくありて。

柴賣

所 附近の市。

人物 慧能。

柴を買ふ客。

金剛經を誦する客。

其他。

慧能 柴へ、柴へ、柴は能う御座んすか。

一客 柴を見せんか。

慧能 何うぞ御覽下さい、今朝刈つた許りの所です。

一客 宜しい、買ひませう、直ぐ其處の家だから面倒だが持つて来て呉れまいか。

慧能 畏まりました。

一客 さー此家じゃ。

慧能 それでは持つて参りませう(と、門内へ入る、暫くして錢を財布へ收めつゝ門外へ出で来る)

他の一客 (最前より此門前に立ち金剛經を誦す、二三人集りて聴聞し居る)……………是故須菩提。

諸菩薩。摩訶薩。應如是。生清淨心。不應住色生心。不應住聲香味觸法生心。應無所住。而生其心。

慧能 (傾聴して居る)は、一、成る程。若し〜旦那様其經は何の御經で御座いますか。
經を誦む客 これは金剛經と申す。

慧能 御伺ひ致しますが阿方は何れの所より來りて此の經典を保持なさいますか。

經を誦む客 私は荊州黄梅縣の東禪寺から來ましたのじや、其の寺は五祖弘忍大師のおいでなされて化を主つて居られる所で、門人一千有餘、私は其處へ往つて、禮拜して此の經を聽受致しまし

た。大師は常に俗僧を勸めて、但金剛經を持せしめて、自ら見性して、直に了じて成佛おさせなさいませぬ。

慧能 あゝ有難い事です、私も行つて五祖を拜したいが、惜しむらくは家貧にして老母を顧ねばならませぬ。あゝ。

經を誦む客 はゝ、これは御奇特のこと、察するところ御身は孝子よな、一子僧となれば九族天にあげらるゝとか、御身の如き者を五祖に謁せしめる、是れ佛勅である、宜しい私阿方に銀十兩をあげませう。之を以て當分老母の衣糧に事缺かぬやうにして黄梅に往つて五祖を拜しなさい

慧能 有難う御座います。

五祖に謁す

所 黄梅。

人物 慧能。

五祖忍大師。

弟子澤山。

慧能 (旅装束にて東禪寺の寺門に至る) あゝ母上に別を告げ申し、三十日餘にして漸く寺門に達し

た。母上は如何に遊ばされて居るであらう。屹度御教を畏みて立派に佛道を成じて、父の菩提を弔ひまつらん、さうじや、さうじや。(寺門に入る)

一轉して本堂となる。

弟子僧 (忍大師に對ひて) 大師様只今一人の百姓らしき若者が旅装を致しまして、大師を拜したいと申して参りましたが、如何斗ひまして宜しう御座いませうか。

忍大師 苦じうない之へと申せ。

弟子僧 (立ち去りて慧能を伴ひ來る)

慧能 (大師を拜す)

忍大師 汝は何れの方の人ぞ、何物をか求めんと欲するのか。

慧能 私は嶺南新州の百姓で御座います、遠く來つて師を禮します、惟作佛を求めて餘物を求めませぬ。

忍大師 汝は是れ嶺南の人、又是れ獐獠、若んぞ作佛するに堪へうぞ。

慧能 人に南北はありますけれど、佛性には本南北はありません、獐獠の身と和尚とは同じくありませんが、佛性に何の差別がありません。

忍大師 兎に角皆について作務せい。

慧能 和尚に申す、弟子自身常に知慧を生じます、不離の自性、即ち是れ福田です、未審し和尚何の務をか作さしむ。

忍大師 この猶獠根性大利、汝更に言ふこと勿れ槽廠に著き去れ。

八ヶ月餘經過

所 東禪寺の後庭。

人物 慧能。

忍大師。

慧能 (箒を以つて頻りに庭をはき居る)

忍大師 (近づきて) 慧能よ。

慧能 これは〜大師様。

忍大師 吾思ふ汝が見の用ふ可きことを、さりながら悪人の汝を害すること有らんことを恐れて、遂に汝と與に言はず、汝之れを知るや否や。

慧能 弟子も亦師の意を知つて敢て堂前にゆきません人に覺らしめまいと。

諸門人召喚

所 五祖の室。

人物 忍大師並に諸弟子。

忍大師 吾汝に向つて説く、世人生死事大である、汝等日を終るまで只福田を求め生死の苦界を出離せんことを求めず、自性若し迷はば福はごうして救へやうぞ、汝等各去つて自の知能を看、自の本心般若の性を取つて各一偈を作り來りて吾に呈して看せしめよ、若し大意を悟らば、汝に衣法を付して第六代の祖となさん。

一同 (拜伏)

一轉して弟子達の部屋、二三の弟子僧對話して居る。神秀襖を隔て、聞く。

弟子僧甲 私共、心を澄まし意を用ひて偈を作つた所が及びもつかんことじや。

弟子僧乙 さうだとも、さうだとも神秀上座が居ら、上座は現に教授師である。

弟子僧丙 私共は只上座の教を受ければ善いのだ。

神秀 (襖を隔て、之を立聴き深き思入あり) こりや是非私が偈を呈せねばなるまい。

歩廊

所 歩廊。

人物 神秀。

忍大師。並に弟子僧數名。

神秀 (夜三更燈を執つて出づ神秀偈成つて、一十三度前後四日を経てなほ思ひ切りて偈を呈することを得ぬ) 廊下に書付け置けば人の批評もあらん、その批評善ければ名乗りて出ん、そうじや、そうじや。(南廊の壁間に身はこれ菩提樹。心は明鏡臺の如し。時々勤めて拂拭せよ。塵埃をして惹かしむること勿れと書す、秀偈を書し了つて房に歸る。天明五祖盧供奉を連れ來りて畫圖の相を繪せしめんとす、忽ち其偈を見て)

忍大師 供奉、書くことは措け、御苦勞であつた、經に云く凡そ有ゆる相皆な是れ虛妄と、但だ此の偈を止め人に誦持せしめん、此の偈に依つて修せば惡道に墮することを免れん、此の偈に依つて修せば大利益あらん。門人共よ、炷香禮敬せよ。

門人 (炷香禮敬す)

忍大師 盡く此の偈を誦まば即ち見性を得ん。

門人 (偈を誦して善哉と歎す)

訓戒

所 堂。

人物 五祖。

神秀。

忍大師 (三更秀を喚んで堂に入らしめて) 偈は是れ汝が作なりや否や。

神秀 實に是れ秀が作なり、敢て妄に祖位を求めず望むらくは和尚慈悲、弟子に小知慧ありや否やを看たまへ。

五祖 汝、此の偈を作らば未だ本性を見ず、只門外に到つて未だ門内に入らず、此の如きの見解を以て無上菩提を求むとも了に得べからず、無上菩提は須らく言下に自の本心を識り、自の本性を見、不生不滅なることを得べし、汝且らく去つて、一兩日思惟し、更に一偈を作つて將ち來れ、吾汝が偈を見て、若し門に入得せば汝に衣法を付せん。

神秀 (作禮して出づ)

兩日の後

所 碓房。

人物 一童子。

慧能。

一童子 (碓房に於て過て其の偈を唱誦す)

慧能 は、一、此の偈は未だ到つてゐないな。本性が未だ見えてゐないな。はて誰の作であらう。童子よ、童子よ、此の偈は誰の作であるか。

一童子 獼猴殿、お前は知らんのか、大師は世人生死事大であると仰せられて、衣法を傳へたいから門人に偈を作つて持つて來い、若し大意を悟らば衣法を傳へて第六祖にせうと仰せられたのだそれで神秀上座が南廓の壁上に於て、無想の偈をお書きになつた、大師は人をして皆な誦せしめ、此の偈に依つて修せば惡道に墮することを免る、此の偈に依つて修せば大利益であるべしと仰せられた。

慧能 私は此で碓を踏むこと八ヶ月餘、未だ曾つて堂前に行つたことはありません、どうか私を連れていつて堂前に至つて禮拜させて下さい。

一轉して堂前

童子 (引いて堂前に至つて禮拜せしむ)

慧能 慧能は字を識りません、何卒讀んで下さい。

別駕 (張日用と云ふものありて便ち高聲に讀む)

慧能 (聞き己つて) 私も一偈があります、どうぞ別駕さん、書いて下さい。

別駕 お前も亦偈を作る、それは珍しいな。

慧能 無上菩提を學ぼうと思へば初學を輕んじなさんな、下々の人に上々の智があり、上々の人に沒意智がある、若し人を輕んぜば無量無邊の罪があらう。

別駕 さ一お前偈を誦せよ吾お前の爲に書かう、お前が法を得たら先づ私を度して呉れ、此言を忘るゝな。

【偈】菩提本樹無し。明鏡も亦臺に非ず。本來無一物。何れの處にか塵埃を惹かん。人々來りて此偈を見驚歎す。

甲僧 これは驚いたね。

乙僧 奇ではないか、貌では人は論せられんな。

丙僧 あきるゝの外はない哩。

五祖 (衆人の驚怪するを見たまひ、人の損害せん事を恐れ、遂に鞋を將つて偈を擦し了つて曰く) 亦未だ見性が出来てゐない。

衆 さう仰有ればそうだなー。

次日

所 碓房。

人物 五祖。

慧能。

慧能 (石を腰にして米を舂き居る)

五祖 (潜かに碓坊に來りて之れを見て) 求道の入法の爲に軀を忘るあゝ斯うもせぬばならぬかなー

慧能 や、これは大師様。

五祖 米は熟したか未だか。

慧能 米はすつと前から熟して居ります、がまだ籩にかけることが缺けて居ます。

五祖 (杖を以つて碓を撃つこと三下して去る)

慧能 (合点の面もち)

一轉祖室

慧能 (三鼓にして祖室に入る)

五祖 (袈裟を以て遮圍して人をして見せしめず、爲に金剛經を説く) 應無所住而生其心。

慧能 何んぞ期せん自性本清淨ならんとは、何んぞ期せん自性本自ら具足せんとは、何ぞ期せん自性本動搖無しとは、何んぞ期せん自性能く萬法を生せんとは。

五祖 本心を識らねば法を學ぶとも益は無い、若し自の本心を識り自の本性を見れば即ち丈夫天人師佛と名く、汝を第六代目の祖となす、善く自ら護念して廣く有情を度し將來に流布して、斷絶せしめるな。

慧能 有難う御座いました。

五祖 昔達磨大師初めて此の土に來られた時、人未だ之れを信せない、故に此の衣を傳へて以つて信體と爲して、代々相承した、法は則ち以心傳心じや、皆自悟自解せしめた、古より佛々惟だ本體を傳へ師々密に本心を付した、衣は争の端である、汝に止めて傳ふるな。

慧能 は、ー。

五祖 汝に此衣を傳へたからは命懸系の如くであらう、汝須らく速かに去れ、恐らくは人が汝を害せう。

慧能 何方へ向けて去りませう、私は本南中の人間、此邊の山路を知りません、何うして江口に出られませうぞ。

五祖 心配すな、私が送つて遣はす。
慧能 は、忝う存じます。

九江驛

所 九江驛。
人物 五祖。

慧能。

五祖 さし船に乗れ。

慧能 は、。

五祖 (艫を把つて自から搖ぐ)

慧能 和尚さんどうか坐つて下さい、弟子が艫を搖ぎませう。

五祖 いや私がお前を渡して遣らう。

慧能 迷ふ時は師が渡して下さる、悟り了れば自から渡します、慧能は邊鄙の生れで語音だも正しくありません、師の法を傳ふことを蒙つて、今已や得悟致しました、只まう自性自度致しませう。

五祖 如是如是、以後佛法汝に由つて大に行はれるであらう、汝去つて三年吾は世を逝るであらう
汝は今さし去れ、努力めて南に向へよ、急いで説くな、さうすると佛法が起し難い。
慧能 さらば、さらば、師の君よ。

磐石上の説法

所 山中。

人物 慧能。

慧明。

衆人。

慧明 衣法己に南すと五祖の言、誰人が傳授すと問へば、能者之を得たりとの御答、彼處に見ゆるは
確に慧能の姿、いで追付かん。(後を追ふ)

慧能 (悟りて逃ぐ)

慧明 (追付く)

慧能 (衣鉢を石上に擲下して) この衣は信を表す、力を以て事を争ふことが出来やうや。(草莽の
中に隠くる。)

慧明 (探せども出ず) 行者行者私は法の爲に來つたのです、衣のために來たものではありません。

慧能 (遂に出で磐石上に坐す)

慧明 (作禮して) 望むらくは行者我が爲に說法したまへ。

慧能 汝既に法の爲めに來らば諸縁を屏息せよ、一念をも生するな、吾汝の爲に説かん。

慧明 (黙つてゐる)

慧能 不思議不思悪、正與麼の時、那箇か是れ明上座本來の面目。

慧明 (言下に大悟す) は、一。して上來の密語密意の外に還た更に密意がありませんや否や。

慧能 汝が與めに説く者は即ち密に非ず、汝若し返照せば密は汝が邊に在り。

慧明 之よりは阿方を師と頼みまする。

慧能 (去る)

慧明 (山を下りつゝ追手の衆人に會ふ)

衆人 慧能の在處は分つたか。

慧明 崔嵬に涉つたが竟に踪跡が無い、これは別道に尋ねたがよからう。

衆人 合點だ。(去る)

老婆宿を拒む

所 山中の一軒家。

人物 老婆。

下男。

下女。

慧能。

老婆 もう日も暮れました。早く戸を入れて休むがよいぞや。

下男、下女 はい、はい。(戸を繰らんとす此時慧能旅路に疲れて來る)

慧能 (老婆に會釋して) 老婆殿、私は旅の僧で御座るが、大層疲勞致した。此上歩む事思ひも寄らす。何卒御慈悲を以て一夜の宿をお願い申す。

老婆 あゝそれは御氣の毒ですな。然し私方は宿屋では御座いませんのでの。

慧能 左様にも御座らうが、御情を以て。

老婆 いやなりません。勝手に何處へなりと行つて宿を求められよ。(下男下女に對ひ) お前達は何を愚圖愚圖して居るか、さつさと戸をこざしなさい。

下男、下女 (命に従ふ)

慧能 (仕方なしに石上に憩ふ折しも月出で來る慧能月に對ひて般若心經の末節を誦す) 能除一切苦眞實不虛故說般若波羅密多咒即說咒。曰。揭諦揭諦。波羅揭諦波羅僧揭諦。菩提娑婆訶。

老婆 (盆に團子を戴せ戸を開けて徐ろに出で) 今しがたは誠に失禮致しました。斯る御精進の御僧とは知らず、誠に失禮致しました、平に御容赦下さいませ。之は殘物に御座りますけれど、お上り下されませ。(盆を差出す)

慧能 之は御供養、恐れ入り奉ります。

老婆 (下男下女に再び戸を開かせ僧に茶を勸む)

慧能 私が黃梅に居りました時に、童子が謠つて居るのを覺へました御奉謝に月に對して謠ひませう (歌の内容活動寫眞になつて顯現す)

一、婆羅宛期國の列士池

西に三獸の牽堵波あり

如來菩薩の行の爲め

身をやきませし處なり

二、劫初の時に此の野邊に

狐と兔と猿殿と

三匹居りて親しめり

類を異にし居りながら

三、天帝釋は菩薩行

修するものを驗さんと

降靈應化一人の

老夫と爲りて謂ひけらく

四、二三子は善く安穩か

驚き懼ることなきか

曰く豊草に涉りつゝ

茂林に遊べば歡ばし

五、老夫の曰く二三子は

情厚くて樂しぶと

遠く尋ねて我飢へぬ

何かな食を賜へよこ

六、少らく此に留れよ

彼等の路を分けつゝも

狐は濱に鯉をとり

猿は林樹に花果を得ぬ

七、兎空しく還り來て

左右にこそは遊躍す

老夫謂へらく未だ和せず

兎のみ空しく返りたり

八、兎は譏を聞きし時

狐や猿に曰ひけるは

樵蘇聚めよ作すあらん

狐猿は競ひ聚めけり

九、猛焰いまや盛なり

兎の曰く仁者我

此身を以て供養せん

畢に火にこそ入りにけれ

十、老夫帝釋に復りつゝ

骸を收め嘆き曰ふ

あゝこの跡よ混びざれ

月の輪にこそ残れやと

(終末月の兎の唱歌並に唐兒の装せる兒童等の黄金の白に銀の杵の遊戯あり)

老婆 誠に面白きお話を承りました

下男、下女 (額づく)

慧能 あは……………

慧能女子の難を救ふ

所 谷間。

人物 慧能。

女子。

女子 (母の病を祈らんとて祠に詣で歸るさに山より轉び落ちたる所)

熊 (女子の左より) うー。

虎 (女子の右より) うー。

慧能 (此様を見て念珠を取り出し女子の枕許に座す)

虎、熊 (慧能の柔輦の様を見て首を垂る)

女子慧能を父の家に伴ふ

所 獵師の家。

人物 慧能。

女子、及び父母。

女子 危い所をお救ひ下され何と御禮の申し様も御座いません。

慧能 人を助けるは僧侶の役目、必ず御禮御無用に。

女子 父の家は之で御座ります、さ、御越し遊ばして下さいませ。

慧能 然らば御免蒙るで御座らう。

女子 阿母さん只今歸りました。

母 大層歸りが遅いので心配致して居ました。

女子 阿母さん谷間に落ちて、其上に虎や熊に視はれ危き所を此和尚さんに助けられ、

母 それは何とも御禮の申しやうもありませぬ。

慧能 いや、些細なこと、御禮には痛み入る。

父 (獵具を持つて外より歸り來り其話を聞く) 委細の様子は今其處で。之は娘が命の親。ま、何卒御緩くり。

網守

所 山。

人物 慧能。

獵師等大勢。

慧能 (網を守りつつ) 貪瞋痴の三毒にさへられて、遂に果敢なき野邊の露、それをも忘れて利を競ふ、思へば浮世じやな。(兎一匹網にかゝる、慧能手を以て助け逃す)

獵師等 (獲物を携へて來る)

獵師甲 此獲物は我が物じや。

獵師乙 何を吐すぞ之れは我のじや。

獵師甲 おのせは人の物を盗らうとするのか。

獵師乙 何だご私を泥棒だごぬかしたな。(山刀を抜いて斬つてかゝる)

獵師甲 何を小癩な。

他の獵師等 まて、まて、まて。

慧能 兩人暫らく、輕舉忘動するな。人は鹿の肉を食ふて生きれど、人は何に食はるゝと思ふ。

獵師甲乙 (顔見合す)

慧能 無常迅速は人の常である、人は眞理の爲にこそ身は捧ぐべけれ。己が利、己が慾に、萬物一体の旨を忘れて争ふべきではないぞ。

獵師甲乙 (理解ゆきて鉢巻を取り低頭す)

他の獵師 和解じや和解じや。(携へ來れる酒盃をまはす)

獵師の娘 (肉釜を運び來る)

獵師等 (肉をつゝく) 御上人様も一緒に。

慧能 乃公か、乃公は茄子を御馳走にならうか。あは……………

法性寺

所 廣州法性寺。

人物 慧能。

印宗法師。

多くの僧侶。

印宗法師 (涅槃經を講す折しも風吹き旛動く) 見よ見よあの様を。

一僧 風の動くなり。

他の一僧 旛の動くなり。

慧能 (進んで) 是れ風動にあらず、旛動にあらず、仁者の心動くなり。

一衆 (駭然たり)

印宗法師 (延いて上席に) まづこれへ。行者は定めて常人に非らん、久しく聞く黄梅の衣法南に來るるご是れ行者ではないか何うか。

慧能 いかにも。

印宗法師 (作禮して) 何卒傳來の衣鉢を大衆に御示し下さるならば有難う御座る。

慧能 いかにも。(達磨の衣鉢を示す)
一衆 (歸服)

刺客

所 韶州曹溪の寶林寺。

人物 慧能。

行昌。(後に志徹と改む)

慧能 名譽、權勢、財寶を求むる心より、人に相互諸和の心が缺け、彼此共濟の實が擧げられず、却て輕進妄作の憾がある。あゝなげかはしいことである。行昌と云ふ人物必ず刺客に間違ない。我に思案がある。さうじや、そうじや。(座間に金十兩を置く)

行昌 (忍び來り將に害を加へんと欲す)

慧能 (頸を舒べて之れに就く)

行昌 (刀を揮ふもの三たび悉く損ふところなし)

慧能 正劔は邪ならず、邪劔は正しからず、只汝が金を負ふて汝が命を負はず。

行昌 (驚仆して久しくあつて方に蘇る) 何卒御哀み下さいまして過を許し出家させて下さいませ。

慧能 さー此十兩を遣る、之を以つて且らく去れ、恐らくは皆がかへつてお前を害するであらう、汝他日形を易へて來い、私は受けて遣る。

行昌 (感謝の涙に暮る)

宣詔

所 寶林寺。

人物 勅使薛簡。

慧能。

其他大勢。

慧能 御勅使様には能くゐらせられました。

薛簡 勅使の趣承はられよ、神龍元年上元の日、則天中宗詔して曰く、朕安秀二師を請じて宮中に供養す、萬機の暇に毎に一乘を究む、然るに二師推讓して云く、南方に能禪師有り、密に忍大師の衣法を受け佛心印を傳ふ彼を請じて問ふべしと、今内侍薛簡を遣はして詔を馳せて請迎す、願くは師慈念して速に赴いて京に上れど。

慧能 忝き儀には候へども、疾の故に御辭退申し上げます、願くは林麓に終らしめ給へ、委細は上表

仕らん。

薛簡 疾となれば是非もなき事ながら、師に問ふべき一義あり、そは他ならず、京城の禪德皆云ふ道を會せんことを欲せば、必ず須らく坐禪習定すべし、若し禪定に因らずして解脱を得る者は未だ之れ有らざるなり、未審、師の所説の法如何に。

慧能 道は心に由つて悟る豈坐に在んや、經に曰く若し如來若くは坐し若くは臥すと言はば、是れ邪道を行す、何が故ぞ從來する所無く、亦去る所無しと、無生無滅は是れ如來清淨の禪なり、諸法空寂は是れ如來清淨の坐なり、究竟無證豈況んや坐をや。

薛簡 大きやかなる御教、早速立ち歸り闕下に伏して奏聞せん。

九月三日詔あつて師を獎諭す

師老疾と辭して朕が爲に道を修す國の福田なり、師は淨名の疾を毘耶に托して大乘を闡揚するが若く、諸佛の心を傳へ不二の法を談す、薛簡師の如來の知見を指授することを傳ふ、朕積善の餘慶、宿種の善根あつて、師の出世に値うて頓に上乘を悟る、師の恩を感荷し頂戴して已むこと無し、並に磨衲の袈裟及水晶の鉢を奉ず、韶州の刺史に勅して寺宇を修飾せしめ、師の舊居を賜うて國恩寺と爲す。

國恩寺の塔

所 韶州國恩寺。

人物 慧能。

法海。

神會等。

慧能 あ、塔は成つた。我は八月に至つて世間を離れん、汝等疑あらば早く須らく相問ふべし、汝が爲に疑を破して汝が迷をして盡さしめん、吾若し去らば後に人の汝に教ふる無らん。

法海等 (聞いて悉く皆な涕泣す)

神會 (唯一人神情動せず、亦涕泣することなし)

慧能 神慧小師却つて得たり、吾自ら去處を知る何ぞ悲泣せん、法性本生滅去來無し。

八月初三日

所 國恩寺。

慧能。諸の徒衆。

慧能 汝等各位に依つて坐せよ、吾汝と別れん。

法海 和尚何の教法をか留めて後代の迷人をして佛性を見ることを得せしめん。

慧能 汝等諦に聴け、後代の迷人若し衆生を識らば即ち是れ佛性、若し衆生を識らずんば萬劫に佛を覓れども逢ひ難からん。

法海 衆生相和し相救ふ其處に淨土は在すとや。

慧能 眞如自性はれ眞佛。邪見三毒是れ魔王。

法海 人間の輕進妄作皆虛妄とや。

慧能 我が臨修の偈を聴け。

兀々として善を修せず

騰々として惡を作さず

寂々として見聞を斷じ

蕩々として著すること無し

法海 有難く頂戴し奉る。

慧能 (端坐三更の頃ほひ) 吾行かん。(奄然として遷化す、時に異香室に満ちて白虹地に属る、林木白に變じ禽獸哀鳴す。)

——幕——

大正十四年九月二十四日印刷
大正十四年十月四日發行

(定價金參拾錢)

不許複製

印刷所	印刷者	著作兼發行者	福岡市新大工町五〇
大場印刷所	大場哲夫	齋木延次郎	福岡市上名島町五二
			福岡市上名島町五二

福岡市大名町

發行所

女子高等文化學院



終